

百合山古墳群

—県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書—

2010年1月

財団法人 和歌山県文化財センター

例 言

1. 本書は、和歌山県紀の川市竹房及び同市桃山町元に所在する百合山古墳群の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県営畑地帯総合整備事業に伴うもので、和歌山県の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査並びに報告書の作成は、和歌山県文化財センターの村田 弘が担当した。
4. 調査及び整理作業で作成した実測図・写真・台帳等の記録資料は、財団法人和歌山県文化財センターが保管している。

凡 例

1. 遺構実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系(第Ⅵ系・世界測地系)に基づき、図示した北は座標北を示す。
2. 遺構実測図の標高は東京湾標準潮位(T. P値)を用いた。
3. 地区名は調査時の呼称を用い、南から順次A区・B区・C区としている。
4. 本書で使用した遺構の略号はSK-土坑、SD-溝である。

本 文 目 次

I	調査に至る経緯	1 P
II	遺跡の位置と環境	1 P
III	調査の方法	3 P
IV	調査成果	4 P
V	まとめ	10 P

図 版 目 次

図版 1	1. 調査地全景(上空から)
	2. A区全景(上空から)
	3. A区北半部全景(南から)
図版 2	1. A区土坑10(北東から)
	2. A区土坑3(北東から)
	3. A区溝13セクション(東から)
図版 3	1. B区全景(上空から)
	2. B区全景(南西から)
	3. B区土坑101検出状況(北西から)
図版 4	1. B区土坑101南西部石堆積状況(北西から)
	2. B区土坑101土層堆積状況(北西から)
	3. B区土坑101完掘状況(北西から)
図版 5	1. C区全景(上空から)
	2. C区全景(西から)
	3. C区土坑201セクション(東から)
図版 6	出土遺物

挿 図 目 次

写真 1	調査地から北西の平野部を望む	1 P
図 1	百合山古墳群位置図	2 P
図 2	調査区区割図	3 P
図 3	A区遺構セクション土層図	4 P
図 4	A区遺構平面・土層図	5 P
図 5	B区遺構平面・土層図	6 P
図 6	B区遺構セクション土層図	7 P
図 7	C区遺構平面・土層図	8 P
図 8	出土遺物実測図	9 P

I 調査に至る経緯

和歌山県（那賀振興局産業振興部）が、紀の川市域において産業の振興を図るため、安楽川地区1号水路兼用道路事業を計画したところ、当該地区は周知の埋蔵文化財包蔵地百合山古墳群に位置することが判明した。

このため関係法令に基づく諸手続きを経て、和歌山県教育委員会が確認調査を実施することとなった。確認調査は、平成20年10月3日から同31日まで実施され、水路兼用道路の敷設予定地内に11箇所のトレンチを設定し調査にあたった。確認調査の総面積は約408㎡である。

この確認調査では3箇所（本調査のA・B・C区に相当）において5層としている地山面上で溝状の遺構を検出した。これらの溝状遺構はやや弧状を呈するもので、埋蔵文化財包蔵地所在地図に示された古墳の位置と近似ないし一致することなどから、百合山古墳群の消滅古墳の周溝の痕跡である可能性が考えられた。

こうした確認調査の結果から、少なくとも上記の3地区においては、記録保存目的の本発掘調査が必要と判断された。これを受け、和歌山県（那賀振興局産業振興部）は、工事に先立ち、本発掘調査を財団法人和歌山県文化財センターに委託した。

本発掘調査は平成21年8月10日に現地着手し、同年9月20日に現地での調査を完了した。その後出土遺物等の整理業務を実施し、調査報告書を刊行した。

II 遺跡の位置と環境

百合山古墳群は、紀の川市竹房及び同桃山町元に所在する。この辺りは、紀の川南岸の竜門山系が西側に向かってなだらかに標高を下げはじめる最初ヶ峰の西側に位置しており、舌状に張り出し



写真1 調査地から北西の平野部を望む

た丘陵となっている。調査地付近の標高は67～75mほどを測り、北および西側が開けており、紀の川と貴志川平野が一望できる位置に立地している。

現況は、桃・柿を主体とする果樹園として利用されているが、こうした果樹栽培地の開墾は昭和30年代以降になされたものであり、このときの開墾工事等によって百合山古墳群は削平を受け消滅したものと考えられ、現在では古墳の存在した痕跡すら視認することはできない。

百合山古墳群については、昭和47年に和歌山県教育委員会が作成した埋蔵文化財調査カードには6号墳まで作成されているものの具体的な所在は不明で、現在使われている埋蔵文化財包蔵地所在地図にも6基のみ図示されている。ただ、地元での伝承では「百合山の七つ塚」と呼ばれていたことが知られており、本来は7基の古墳が存在していた可能性も考えられる。

このうち1号墳は昭和11年、2号墳は昭和33年に調査されている。調査記録によれば1号墳は、直径8mほどの円墳で、横穴式石室が確認されており、石室内からは、銀環・管玉・切子玉・鉄鎌・刀子のほか須恵器・土師器が出土している。2号墳は、1号墳東南の丘陵斜面に位置し、直径11mほどの円墳で同じく横穴式石室が確認されている。この古墳については、調査後道路工事により破壊されたようであるが、この工事の際し、地元住民により素環頭大刀・刀子・鉄鎌・管玉のほか須恵器・土師器が採取されている。両古墳とも出土した須恵器の型式はTK10型式の範疇で捉えられるものであることから、6世紀中頃にかけての築造と考えられる。

そのほか百合山古墳群の周辺には、西側丘陵に観音山古墳群、南西丘陵に神田古墳が所在しており、平野部には元遺跡が展開している。

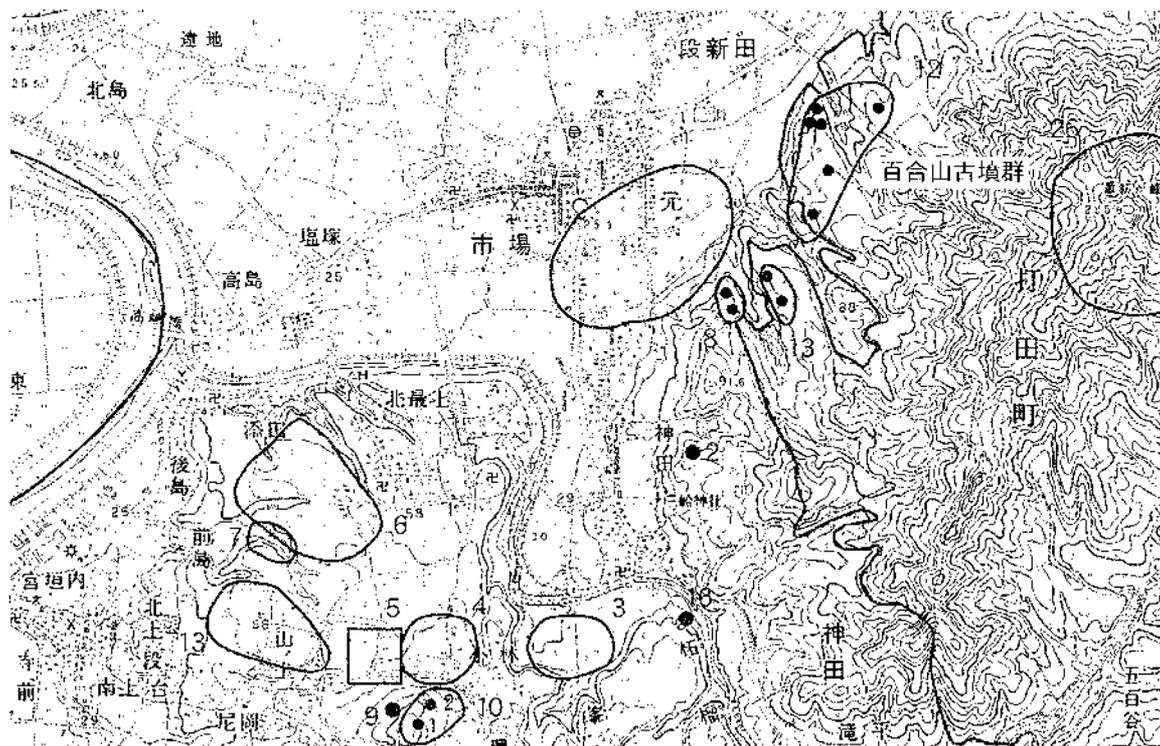


図1 百合山古墳群位置図 1/25000

(打田地区) 12 百合山古墳群 13 観音山古墳群 26 最初ヶ峰城跡
(桃山地区) 1 元遺跡 2 神田古墳 5 最上廃寺 9 尼ヶ岡古墳 10 小林古墳 16 神田経塚

Ⅲ 調査の方法

調査区名は南から順次A区・B区・C区としている。(図2参照)各調査区の面積はA区約120㎡、B区約192㎡、C区約85㎡、総計約397㎡である。

調査では試掘調査で1・2層としている表土及び近世以降の堆積土については、機械による掘削を行い、3・4層については人力により掘り進めた。5層は基本的には明赤褐色の砂質土であり、この上面で遺構を検出した。この上が地山の可能性が高いものと考えたが、念のために調査の最終段階で各調査区とも深さ30cmほどトレンチ状に人力による断割りを行った。

遺構平面図、壁面土層図、遺構セクション断面図については手実測により1/20のスケールで作成した。写真撮影については、4×5版及び6×7版のモノクロームフィルム、35mm版のモノクロ・カラーリバーサルフィルムを使用した他、適宜デジタルカメラによる撮影を行った。この他、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影で調査地全体を撮影したほか各調査区の俯瞰写真撮影を実施

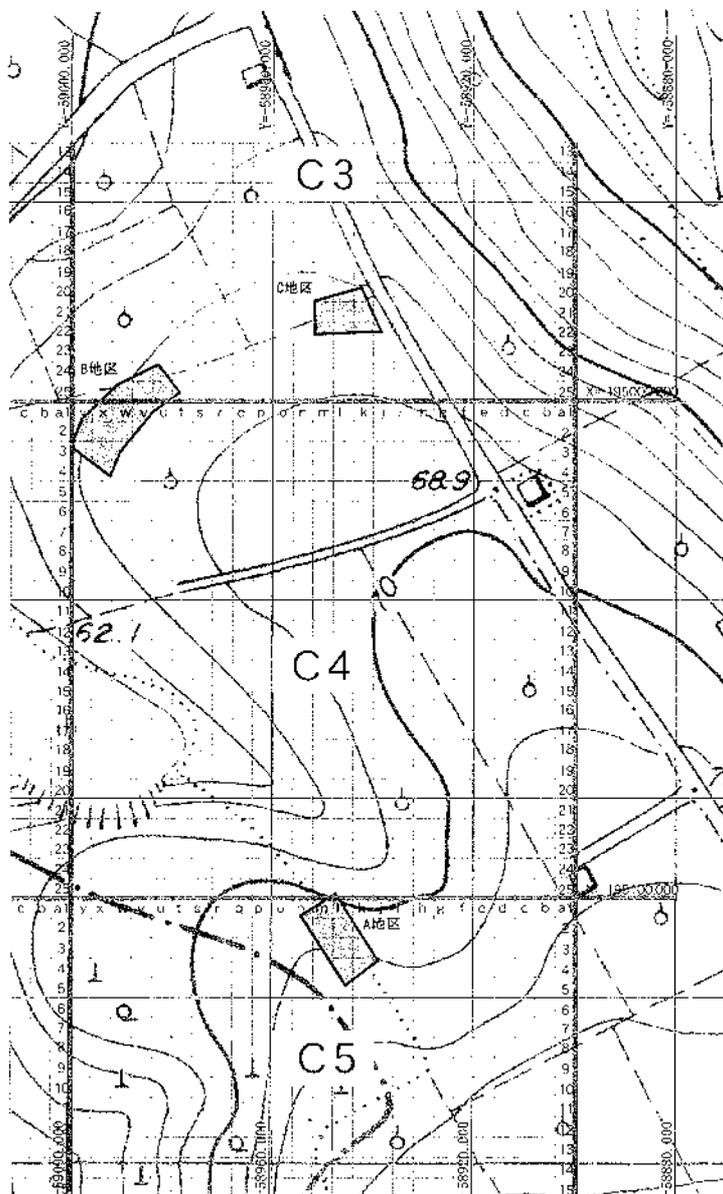


図2 調査区区割図 (S=1/1500)

した。調査区の地区割は、国土座標第VI系(世界測地系)を使用し、今回の調査地を網羅するだけではなく、今後周辺に調査の及ぶ可能性を考え、調査地から北東側約400mに基点(X = -194.700km, Y = -58.700 km)を設けた。この基点から西方向と南方向にそれぞれ一辺100mの正方形区画を1単位とした大区画を設定した。この呼称は東西方向をA~Y、南北方向を1~25とした。次にこの大区画を4m毎に割り、一辺4mの正方形区画を1単位とする小区画を設定した。この呼称は東西方向をa~y、南北方向を1~25とした。(図2参照)遺物の取り上げや遺構の実測は、原則的にこの小区画で行っている。

IV 調査成果

1. A区の調査

調査区の現況は、雑木林となっていた。地元住民によるとこの雑木林付近は、近年まで自治区の共同墓地として利用されており、主として上葬が行われていたとのことであった。

基本層序は、1層としている灰黄褐色の表土及び現代の攪乱土の下に2層の近世以降に堆積したと思われる灰オリーブ色の上が堆積する。その下の3層は、明黄褐色の砂質土で、包含層と考えられるものであるが、出土する遺物の量はきわめてわずかであった。その下は、5層としている明褐色の砂質土であり、地山である。主な遺構は、この面で検出した。以下、主な遺構のみ概述する。

溝1：溝幅は一定でなく、30～80cmを測るもので、深さは最深部でも30cmほどと浅い。わずかに弧を描くように湾曲しているが、東側で途切れている。

溝5：幅80～100cmほどで、深さは40cmほどである。この溝も湾曲して弧状に延び、北側で途切れている。この途切れた先、前述の溝1との間に、土坑7と土坑12を検出した。この土坑が溝の残欠部とすれば、これらはほぼ半円状につながるわけで、円墳の周溝部の可能性がある。

溝13：幅約80cm、深さ40cm弱の溝である。埋土はにぶい黄褐色の砂質土であった。

土坑10：直径1mほどの大きさで、深さは50cmを測る。埋土はにぶい黄褐色の砂質土と明黄褐色砂質土が混在し、さらに少量だが炭の混じった汚れた土であった。この中からは、白磁の小杯、硯、六道銭に使用したと思われる寛永通宝が6枚出土している。このことからこの土坑については、墓であったと考えていいであろう。出土遺物から江戸時代後期から幕末にかけてのものと考えられる。なお、この遺構は前述の2層を切って掘られている。

土坑14：直径約1m、深さは約50cmを測る。明赤褐色の埋土で、40cm大の石が落ち込んだ状態で検出された。出土遺物はないが、この土坑についても土壇墓であったと考えている。その他土壇墓の可能性のあるものとしては、土坑3があげられる。

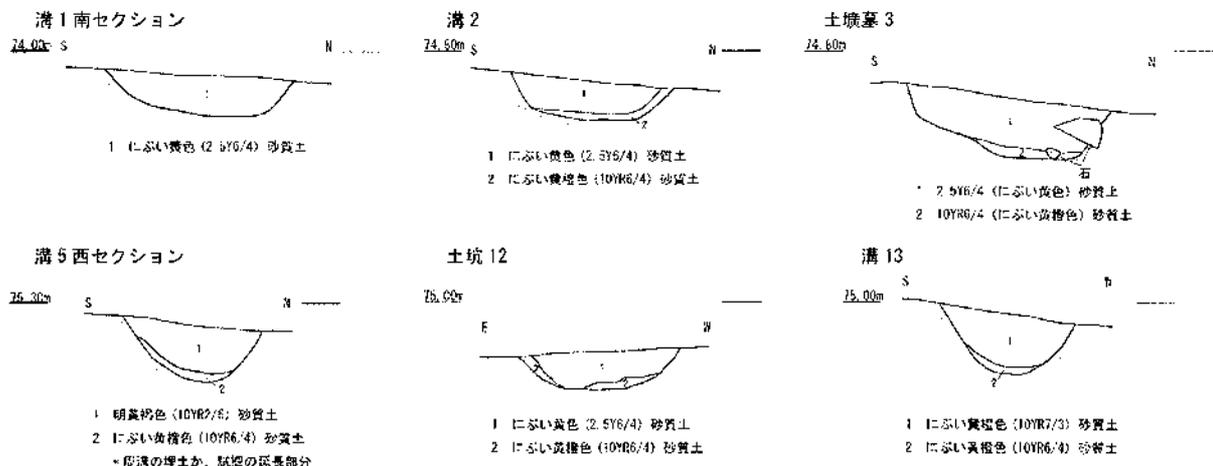
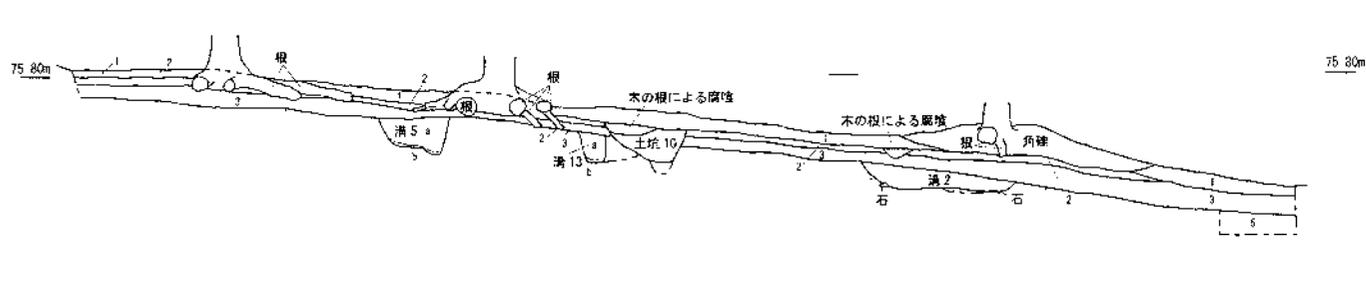


図3 A区遺構セクション土層図 (S=1/40)



- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土・表土
- 2 灰オリーブ色 (5YR/2) 砂質土
- 3 明黄褐色 (2.5YR/6) 砂質土
- 5 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土
- 溝 2 にぶい黄色 (7.5YR6/4) 砂質土
- 溝 6
 - a 明黄褐色 (10YR7/6) 砂質土
 - b にぶい黄褐色 (10YR6/4) 砂質土
- 土坑 10 にぶい黄褐色 (10YR7/3) 砂質土 / 明黄褐色 (2.5YR6/6) 砂質土
- 溝 13
 - a にぶい黄褐色 (10YR7/3) 砂質土
 - b にぶい黄褐色 (10YR6/4) 砂質土

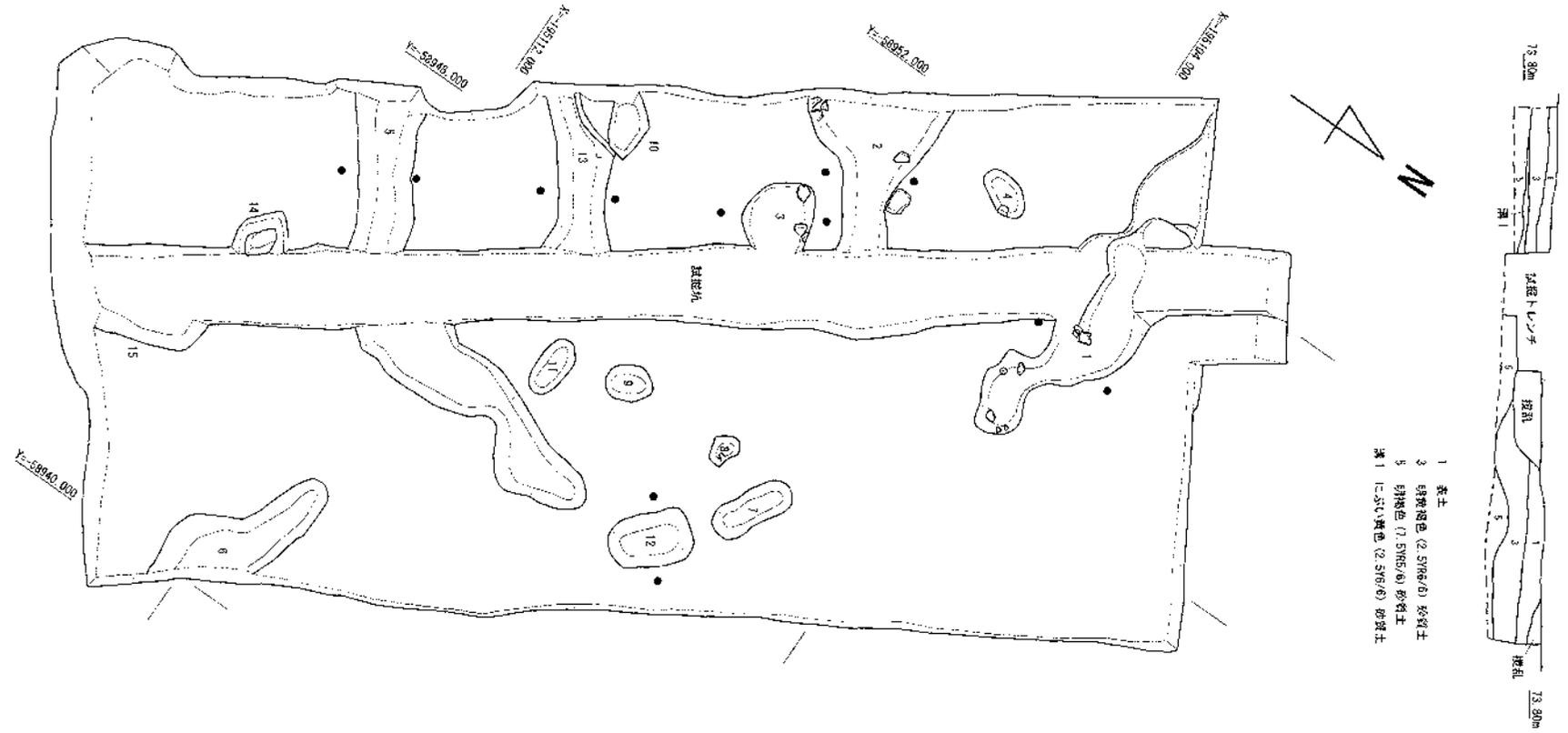


図 4 A区遺構平面・土層図 (S=1/100)



- | | | |
|--------------------------------------|--|-------------------------------------|
| 1 灰黄褐色 (0YR6/2) 砂質土 (現代の埴輪土・表土) | A 灰黄色 (2.5Y7/2) 砂質土 (埴土) | F 棕色 (7.5YR6/5) シルト質土 |
| 2 にごい黄棕色 (10YR7/3) 砂質土 | B 淡黄色 (2.5Y7/3) 砂質土 | G 灰黄棕色 (10YR6/2) 砂質土 (埴土) |
| 2b にごい黄棕色 (10YR7/2) 砂質土 | C にごい黄棕色 (10YR7/3) 砂質土 | H 淡黄色 (2.5Y7/3) 砂質土 |
| 2 にごい黄色 (2.5Y6/4) 砂質土 | D にごい黄色 (2.5Y6/4) 砂質土 | I 淡黄色 (2.5Y7/3) 砂質土 |
| 4 にごい黄棕色 (10YR7/4) 砂質土 (少量の片岩片が混じる) | E にごい黄色 (2.5Y6/4) 砂質土 (少量の片岩片が混じる。3層とよく似る) | J にごい黄棕色 (10YR7/3) 砂質土 (6と似る) |
| 4b にごい黄棕色 (10YR7/4) 砂質土 | L にごい黄棕色 (10YR7/4) 砂質土 (少量の砂混じる) | K にごい黄棕色 (10YR7/2) 砂質土に少量のブロック状が混じる |
| Ea 棕色 (7.5YR6/8) シルト質土 | | |
| f0 棕色 (7.5YR6/8) シルト質土 9%程度片岩片が入る | | |
| 5c にごい黄棕色 (10YR7/4) 砂質土 10%程度片岩片が混じる | | |

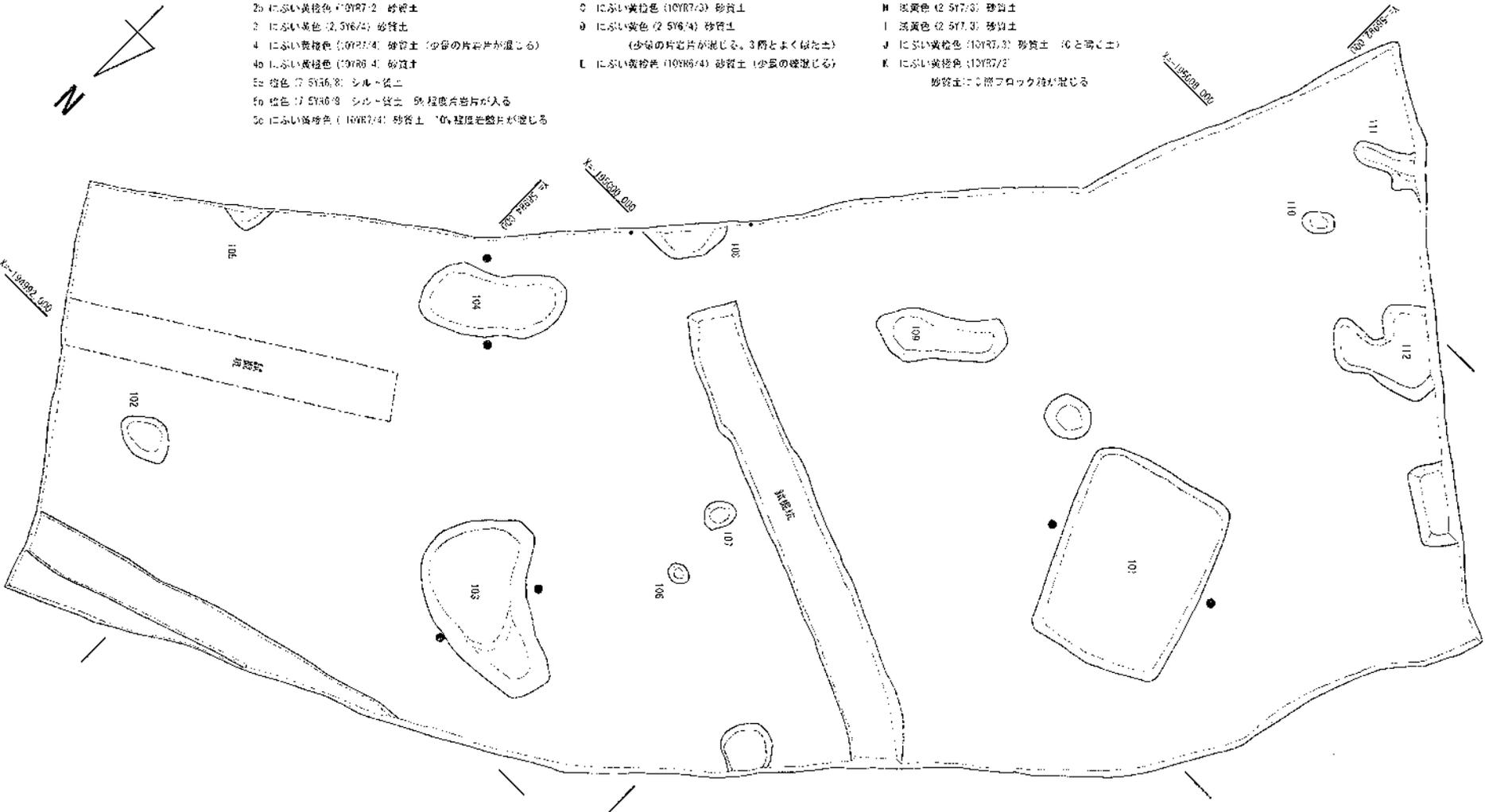


図5 B区遺構平面・土層図 (S=1/100)

2. B区の調査

調査区は、北側を望む丘陵の緩斜面に位置しており、わずかに北西方向に傾斜している。現況は果樹園となっていた。基本層序のうち1～3層は前述のA区と同じであるが、3層と地山である5層との間に4層としているにぶい黄橙色の砂質土が堆積する。また、5層としている地山は明褐色ないし橙色の砂質土であるが、調査区の西側になるにつれて片岩の混じりが多くなるなど一様ではなく、その堆積には凹凸が見られる。

土坑101：調査区西側で検出した大型の上坑である。長辺3.1m、短辺2.2mを測るほぼ長方形を呈し、深さは80cm弱を測る。垂直に近い掘り込みをしており、底面も平坦に仕上がっていた。

断面観察の結果からは、埋戻されるに当たっては、最初、南西方向から5～15cm大の角礫の多く混じった土で押し出すように埋め、その後東側から幾種類かの上で埋めた後、にぶい黄色の砂質土で一気に埋めていった様子が窺える。なお、最上層の明黄褐色の砂質土では少量の炭が含まれていた。出土遺物はわずかに2片で、ともに下層の角礫を含んだ土から出土している。一つは、須恵器の提瓶の口縁部と思われる破片であり、もう一点は、近世以降のものと思われる瓦片であった。この土坑の性格については不明と言わざるを得ないが、古墳に直接関係するものではなく、近世以降の畑で使われていた貯蔵穴といったものではないかと考えている。

土坑103：長軸3m、短軸1.5mほどのやや歪な形をした土坑で、深さは最深部で30cmほどである。上坑の底には薄くにぶい赤褐色の砂質土が堆積し、それ以外は、にぶい黄色砂質土により埋まっていた。出土遺物は、確認されていない。

土坑104：長軸2.5m、短軸1.0mほどの楕円形を呈する。深さは15cmほどと浅く、底面は比較的平らであった。埋土は、前述の土坑103と同じで、肩口から底面付近に赤褐色の砂質土が堆積し、それ以外は、にぶい黄色砂質土により埋まっていた。また、この土坑においても出土遺物は確認されていない。

土坑109：長軸2.3m、短軸0.7mほどの細長い楕円形を呈する。深さは最深部20cm弱を測り、底部の形状は丸みを帯びた船底状を呈する。埋土はにぶい黄色の単層で、この土坑からも遺物は出土していない。

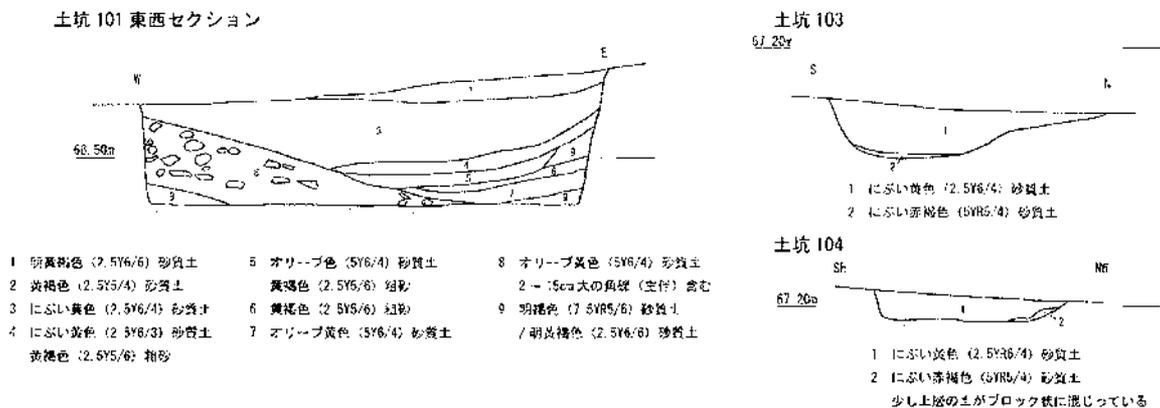


図6 B区遺構セクション土層図 (S=1/40)

3. C区の調査

C区の現況は、果樹園とその農道であり、この地区は東側にも眺望が開けている。基本層序は、他の調査区と大きく異ならないが、4層としている上の堆積は一部に見られる程度である。出土遺物は少なく、近世以降の堆積と考えている2層から須恵器の坏蓋と思われる小片が1点出土したのみであった。

土坑201：調査区の南西隅で検出した土坑で、南側は調査区外にもう少しだけ広がっていくようで、おそらく直径1.2mほどのほぼ円形を呈するものと考えられる。深さは1.2mほどを測る。ほぼ垂直に掘られており、底面も比較的平らになっていた。

土坑203：長軸1.8m、短軸0.8mほどの楕円形を呈する。深さは15cmほどである。試掘調査で確認されていたもので、当初、溝になるものと思っていたが途中で途切れ土坑状になる。埋土は、1層でにぶい黄色の砂質土である。

土坑204：長軸1.7m、短軸1.0mほどのやや歪な楕円形を呈する。深さは10cm足らずと比較的浅い。埋土は前述の土坑203と同じで、にぶい黄色の砂質土であった。

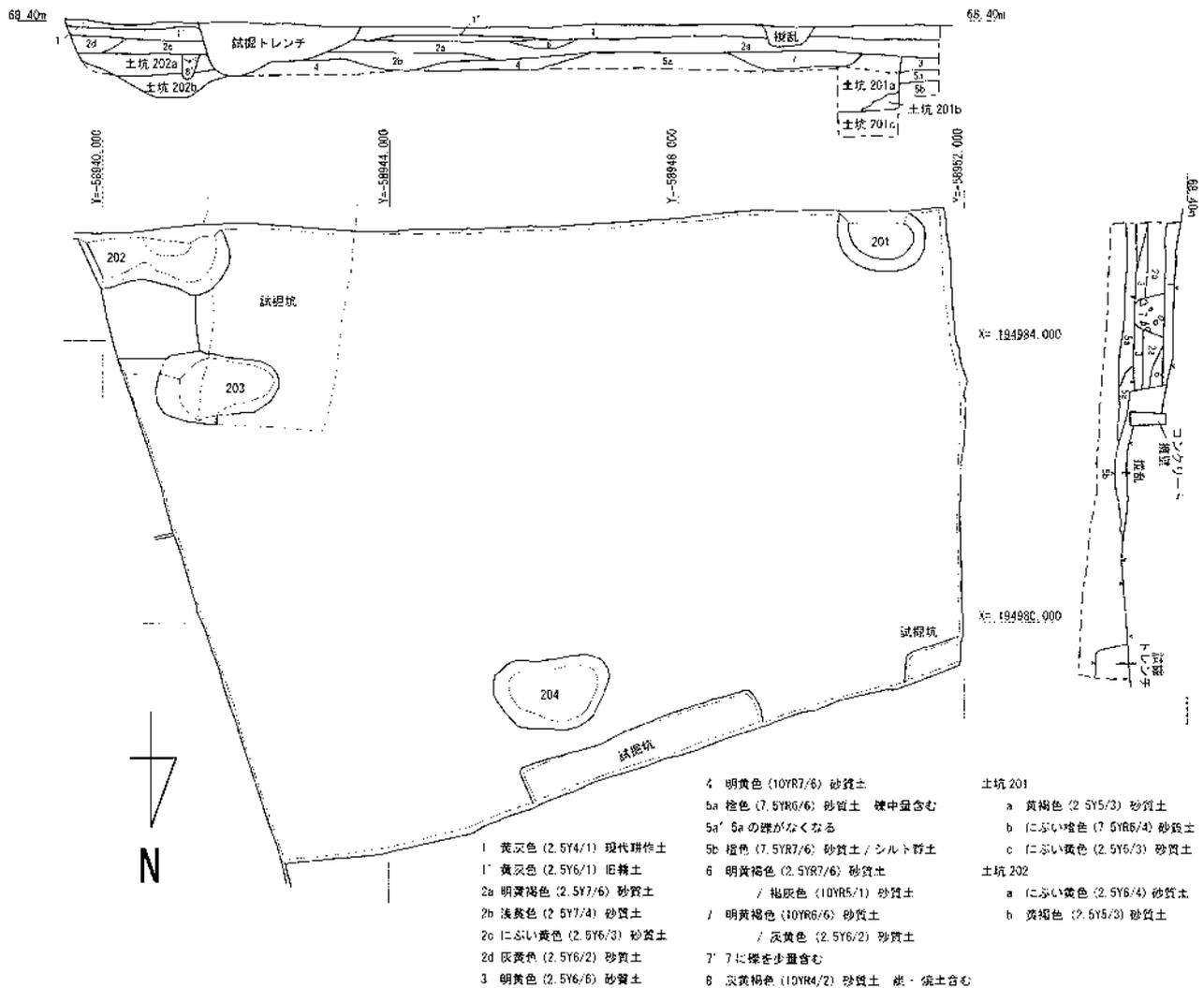


図7 C区遺構平面・土層図 (S=1/100)

4. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、古墳時代のもものと近世のものに大別できる。量的には図示し得なかったものを含めても10点に満たず、極めて少ない状況であった。

このうち(1)はやや軟質の陶器で、上師質の感がある。器形的には鉢とでも呼ぶべきものであろうか。全体に肉厚な製品である。やや外面に張り出した高台を有し、胴部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は内側に丸く折り曲げるように納められている。底部外面を除いてロクロによるナデが顕著に残る。内外面とも明赤色を呈している。口径は復元で20cmほど、器高は9.6cmを測る。用途及び産地については不明である。

(2)は徳利と思われるもので、外面は黒褐色、内面は暗オリーブ灰色を呈する。胴部の最大径は14cmを測る。胴部外面にわずかに盛り上がった一条の灰白色の釉が認められるが、おそらくこれは文字の一部と思われる。焼成は良好である。18世紀後半から19世紀中頃にかけての丹波焼の製品であろう。(3)は石製の硯である。長辺12.1cm、短辺6.5cm、器高は1.4cmを測るもので、四隅は丸味を帯びる。底部外面には、使用していた人物が彫ったと思われる細い線描きよる文字が認められ、かすかに「那賀」の文字が読み取れるがその他は不明である。全体に黒色を呈している。おそらく材質は粘板岩であろう。(4)は猪口である。口径4.2cm、器高2.7cmを測る。素地は灰白色で、高台付け根付近まで明緑灰色の釉が施されている。これら2点(3・4)はともに土壙墓からの出土品であり、葬られた人物の生前の愛用品であった可能性が高い。時期的には、18世紀末から19世紀にかけてのものであろうか。

(5)は須恵器で、口頸部から体部上端のみの破片であるため、全体の器形は不明であるが、提瓶

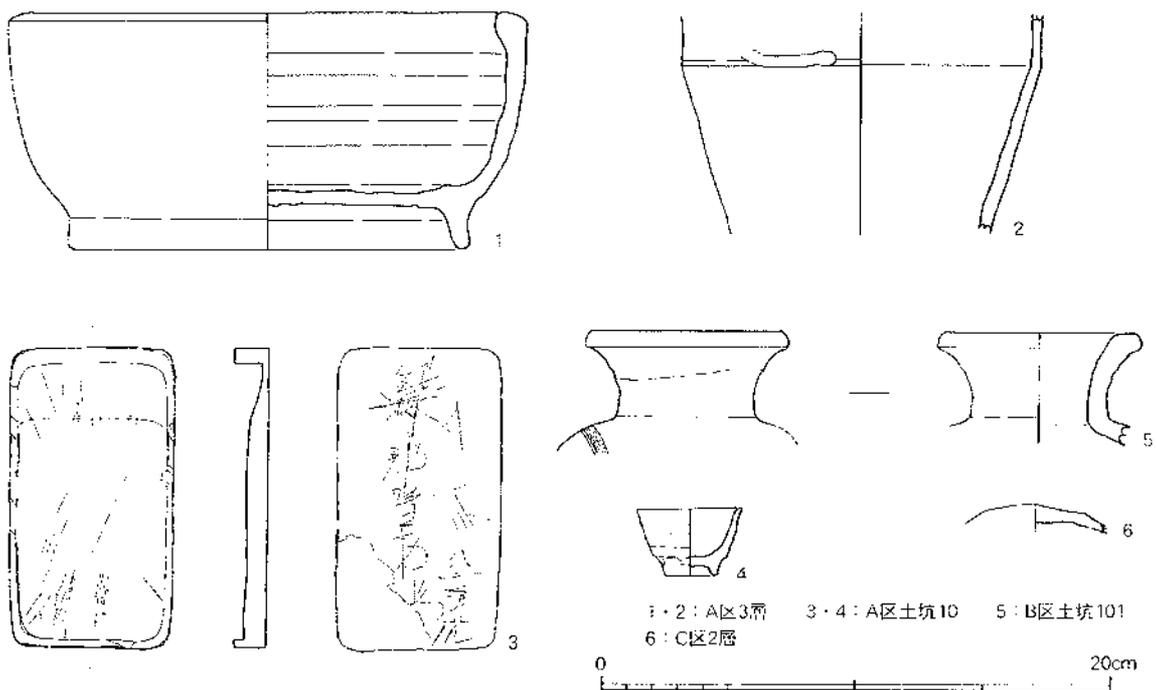


図8 出土遺物実測図

の可能性が高いものと考えている。口径は復元で7.5cmを測る。胎土は密で、1.5mm以下の白色ないし灰色の粒を微量に含む。焼成は堅緻で、内外面ともは暗青灰色を呈し、口縁上端部から体部にかけて自然釉がかかっている。(6)は須恵器の坏蓋の頂部付近の破片と思われる。全体に灰色を呈し、胎土には1mm以下の白色粒を微量に含む。

V. ま と め

今次の調査においては、各調査区でいくつかの上坑、溝などの遺構を検出した。ただし、これら遺構としているものの内、出土遺物が確認されているものはごく僅かであることや、遺構面として5層が平坦ではなく、微妙な凹凸をなしていることから、この窪みを遺構として認識してしまっている可能性も否定できない。

唯一、古墳との関連が指摘できるものは、既述したA区の半円状をなす溝である。仮にこの溝が古墳の周溝の痕跡であったとすれば、直径12~13mの円墳が想定できる。記録に残っている百合山2号墳の墳丘規模は約11mであることから、規模的には充分にその可能性を考えることはできよう。主体部については、おそらく横穴式石室であったものと思われるが、調査区内においてはその痕跡さえ確認することはできなかった。

昭和47年に和歌山県教育委員会が作成した埋蔵文化財調査カードを基にした現在の埋蔵文化財包蔵地所在地図には6基が図示されているが、このA区に相当する場所に該当する古墳はない。このことから仮に古墳であったとすれば、所在不明とされている7基目の古墳に相当するものと考えられる。

いずれにせよすでに開墾や農道工事により消滅している古墳群だけにその全容を捉えることは至難の業である。しかしながらこの百合山古墳群は、紀の川中流域左岸に点在する古墳群の中でも横穴式石室の発達過程等を考える上でも重要な古墳であり、今後も可能な限り調査の対象として追及していく必要がある。

1. 調査地全景 (上空から)



2. A区全景 (上空から)



3. A区北半部全景
(南から)



1. A区土坑10
(北東から)



2. A区土坑3
(北東から)



3. A区溝13セクション
(東から)



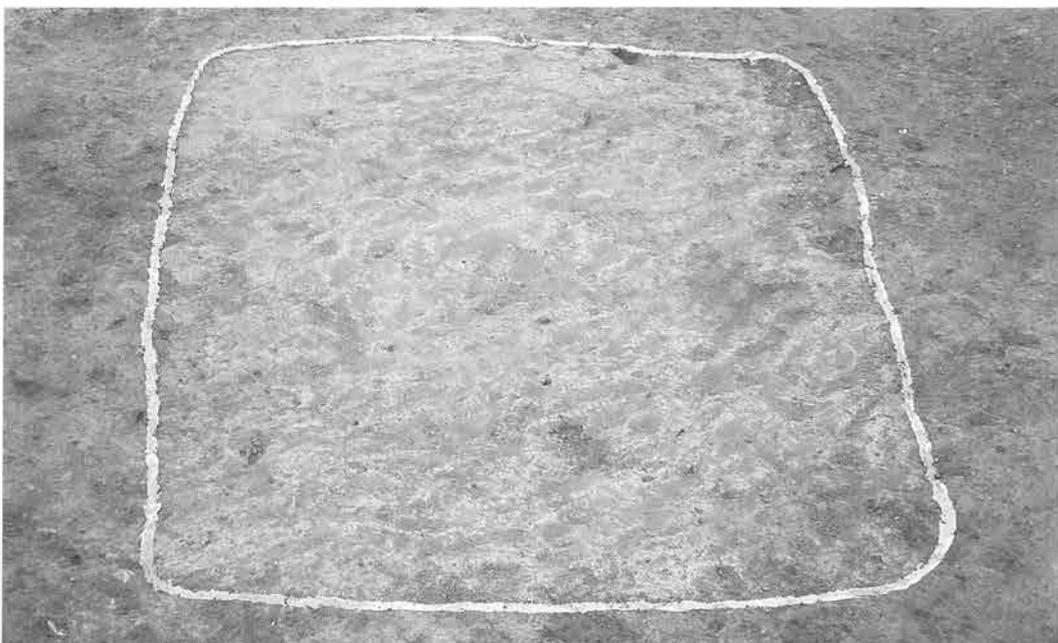
1. B区全景 (上空から)



2. B区全景 (南西から)



3. B区土坑101検出状況 (北西から)



1. B区土坑101南西部
石堆積状況（北西から）



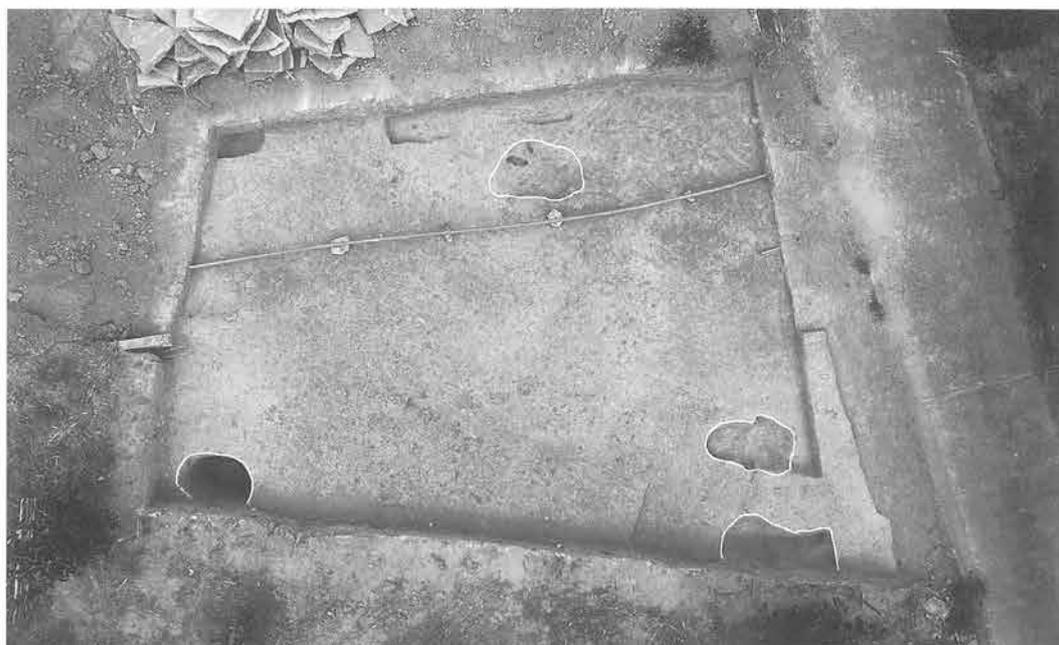
2. B区土坑101土層
堆積状況（北西から）



3. B区土坑101完掘状況
（北西から）



1. C区全景 (上空から)



2. C区全景 (西から)



3. C区土坑201セクション
(東から)





1



2



3



4



5



6



7



8

報告書抄録

ふりがな	ゆりやまこふんぐんはつぐつちようさほうこくしょ						
書名	百合山古墳群発掘調査報告書						
副書名	県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書						
編著者名	村田 弘						
編集機関	(財) 和歌山県文化財センター						
所在地	〒640-8404 和歌山県和歌山市湊571番地1 TEL 073 433 3843						
発行年月日	西暦2010年1月15日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "	㎡	
ゆりやまこふんぐん 百合山古墳群	きのかわし 紀の川市 もみやまちょう 桃山町 もと 元 きのかわし 紀の川市 たけふさ 竹房	30208	12	34° 14' 24"	135° 21' 35"	397㎡	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
百合山古墳群	古墳	古墳時代	古墳の周溝と思われる溝		須恵器	特になし	
		近世	墓		近世陶器・硯		
要約	百合山古墳群は、少なくとも6基からなる古墳時代後期中頃の古墳群と考えられており、このうち2基については、記録が残っているものの、その後の開発によってこれらの古墳は消滅していた。今回の調査では、試掘調査で確認していた周溝の痕跡と思われる遺構を掘り所に古墳の位置を確定させることが目的であった。調査の結果、A区では古墳の周溝の可能性のある溝を検出した。出土遺物としては古墳時代の須恵器が数片出土している。						

百合山古墳群調査報告書

2010年1月15日

編集・発行 (財) 和歌山県文化財センター

印刷・製本 株式会社 ウイング